

助成年度：平成7年度

[所属] 大阪教育大学 教育学部
[役職] 助教授
[氏名] 米田 健 (他計5名)

[課題]

湿潤熱帯における里山林でのブナ科植物の分布と更新実態の把握

－西スマトラ州ミナンカバウ族の伝統的土地利用との関連から－

[内容]

インドネシア西スマトラ州のパダン近郊の農村において、稲作農業を中心とするミナンカバウ族の伝統的な土地利用と共存する近郊二次林（里山林）でのブナ科植物（カシ）の分布と更新実態を研究した。

海拔高 100m から 1800m までの広範囲にわたり対象地域のカシの分布状況を調べた結果、マテバシイ属 16 種、コナラ属とシイ属がそれぞれ 5 種ずつの計 26 種が分布していることを確認した。

カシの種多様性は、低地多雨林でもっとも高く、海拔高度の増加にともない種数が減少したが、植物体現存量で評価したブナ科の優占度は、いずれの標高帯においてもトップクラスであった。

里山林においても、これまで伝統的に行われてきた小面積単位の粗放的な利用であれば、成熟林に分布する種のほとんどが更新していることを確認した。

しかし、火入れされた場所ではカシの侵入が相当程度遅れることが今回の研究結果から予想された。更新に関わる種特性の違い、さらに数種のカシの落葉・開花・結実および幹の肥大成長における季節性についても 2～3 の特性を明らかにすることができた。

近年、里山では畑地が拡大し集約的な利用が急速に広まりつつある。カシの更新力の強さは、速い生長速度と高い萌芽力、さらに用材としては多種に比べ質が落ちるため里山林においても伐採されずに残されている木が比較的多く存在し、それらが母樹として重要な役割を果たしていることなどが原因している。

カシの更新力は種間で異なるため、伝統的な粗放型利用から集約型の利用に変われば、種のスクリーニングが大きくすすむことが予想され、また母樹として機能してきた伐り残し木の喪失は、里山林でのカシの潜在的更新力を大きく低下させることになろう。